

「ケアの倫理」再考

立命館大学応用人間科学研究科
対人援助学領域
人間形成・臨床教育クラスター

近年、正義の原理を頂点に置く伝統的な倫理学は、そのあまりに偏った合理性のゆえに、倫理的な思考の貧困化を招いていると批判され、その対抗理論として「ケアの倫理」が注目されるようになってきた。

この、「ケア対正義」論争は、キャロル・ギリガンが、『もうひとつの声』において、女性たちの声が語るものをすくい上げ、それを別種の道徳様式として理論化したことが、その出発点となっている。

本論文では、「ケアの倫理」の基礎的理解と、その批判的考察をふまえて、「ケアの倫理」が発する問題提起の意味について、多様な側面から考察する。

まず最初に、出発点としてのギリガンの議論を追い、彼女がそれに気づくことができた背景をも含めて、その基本的なスタンスを明確にする。次いで、そうした「ケア・ケアリング」を中心に据えた倫理学の理論化を試みたノディングズの所論を検討し、彼女が人間の存在論的基礎であり、倫理の基礎であるというケアリングのもつ可能性と力を明らかにする。その両者をふまえて、あらためて「正義の倫理」の立場から、「ケアの倫理」を批判的に考察したクーゼの議論を検討する。そして最後に、「正義の倫理」と「ケアの倫理」の二者択一や統合を問うのではなく、むしろそうした志向性を退け、その矛盾の内に踏みとどまり、倫理をたえず問題化し続けるということが、倫理の形骸化を防ぎ、発展の途となるであろうという筆者の立場を明示する。